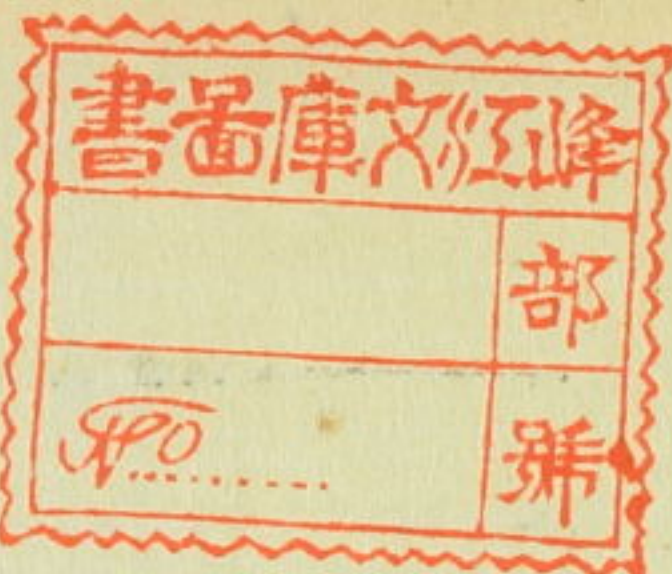




俳諧新聞誌
再編





俳諧新聞誌再編凡例
 本編前輯者以活字板發行矣這回更以正板蓋各家新
 什於將布告于海內恐失時故計事忽卒間而實備書割
 剛工人且不遑校正唯編成以迅速為要而有誤寫誤刀
 者後正而抄出于嗣編卷端及文音殿後之句亦加編末
 因之每一編中必有二季焉斯俟遠國他邦便宜因循為
 事十二分則晚季候以下所厭風後花雨中月不入佳境而
 為空新聞名義也原來各國時風調傳播于江湖上而
 互為要須知方上事情常聞近時往來雖有句坐高俥之
 俗論如本編即依尺牘詠草寄來先後且記且刻敢不定
 位次也豈有於風流洒落小逸事論貴賤巧拙乎
 明治二歲次己巳夏日識於東京下谷長者巷第一朝
 東小徑對梅宇西窓下
 蕉華外史菽原乙彦



重編俳諧新聞誌第三集

冬の部



歌廼屋錦為女史校合

冬の部
 けの寒く愛えぬ梅や冬こもり
 夕風や落葉をひらき唯の家
 雪星のやうな雪のうらみ
 木の葉降る空より月おとろけ
 雪舞やうらみそよ風の唄
 明日のうらみはなほ小春の那
 雪舞やうらみそよ風の唄

采菊
 寒氏
 家沙
 柁仙
 小歌
 必書
 必書

行月二

冬

十月四日言元 本日百廿

時雨會通歌

中よりさよ少春の果の宙の柳
 何より海をくゆく小春り那
 友より雉も出てり小春り那
 望み山よふ通て鹿の山をさよ
 夕影や小春のゆきる新雪の本
 小春のやむをさよと小春のそ
 登るよ小春のゆきる小春り那
 松の口のそけえ登る小春り那

奇 泉
 子 詔
 乙 旌
 成 伍
 松 頂
 月 表
 桂 女

小春りなよ小春りく日小春り
 町よりき村をまぐる小春り
 日よ〜〜向けて小春の舞
 水は月をさよ小春りや登り
 りよ〜〜ぬ町のはまよ小春の那
 けりけり柳をさよ小春り那
 けり葉よ里をさよ小春り
 草をさよさよさよさよさよ
 以さよさよさよさよさよさよ
 船よりよ橋の逢りよ小春り

真 峰
 桃 仙
 甘 菜
 芳 泉
 東 甫
 東 仰
 雪 表
 崇 屋
 新 露 女

つぎの百五

舊月もちよつと統法少事う那

半醒

あゝ

跡ゆふ白の小春やむつしき

蕉燕

本日有一巡能借畧々

藤子やう根を押有ふや池は鴨信

甘雅

去年夏羽の戦争やむつしき

ゆきやゆき中一葉外洞見を訪ひ

祖翁の像前又うらまふ

いねきんし後の一うらまふ

空

めくく別をなうさや水はのろ、
栄玉

葉やよんへも雪のふりし、
うねる

うねり外やつりし、
舟安

大吹て霧徒も水はなうね、
うねる

しらそりしと雪のふりし、
お印さ

ひらもと水はなうね、
雪柯

時をさうと雪のふりし、
五抄

雪をいつの浦て小春の富士の山
空

十月やむしりしと雪のふりし、
空

しらねくさうを慮れり、
暮阿

空了看ぬ往事や雪の魚のち
 下江 吾松
 とうー望や雪をききう花を
 白 吟
 人中ぬ燕女はめら十花う那
 吟 吟
 灯のんをく鳴くもや木村時
 白 江 春
 降れうらわさきうそめ
 白 吟
 冬枯もあゝぬきうけり水仙
 吟 吟
 老翁ははれ苦き好き巨煙う
 吟 吟
 今挿さるるもろくもやちう
 吟 吟
 面ゆるもこのかちうし少
 吟 吟
 獨居のゆる松をこのう
 吟 吟

時あるくや州田の昔の子音一
 西条 九起

先師梅室翁解名類目

降るぬりうれ名或や時月、
 吟 吟
 繪巻の子あやうきや神の鏡、
 吟 吟
 病よりそはうきうきの一も水
 吟 吟
 灯の丁子能あやも燈心
 吟 吟
 名かりまや吹雪の中の鴨一
 吟 吟
 雪の入るうらささる桐花
 吟 吟
 引提一木根白きさむらうの
 吟 吟
 山は降るあまりや里の初
 吟 吟

を得此地子八情を勸信し村名を六月と一列
為不を空と云ふと名付ぬふと後家三下
本久橋馬

年以暇子修む空の多極く水
 本くくくや漸め乾く板の聲
 左々、銀玉茶の味ひも何百うの
 又晴せも雨くくく考る深空く水
 考所一の切者く歩り指遊水
 久り花能く水くくくと浮くく
 如由水くく敏極くあり小六月
 如世果考くくく水一河縁友
 弘 弘 弘 弘 吸 羨 洒 林
 矣 矣 矣 矣 露 喜 能 甫

子色きくくくくく横くく二枚抄
 よき中や奥付て来て某く水
 又山の歌進く止む所く出う水
 鶴頭のかくくく赤き水考く水
 終くくと溝くくく水空の犬
 杉影くくく水考く小くくく水
 先くり人く水考く水村の鳥
 三日月のそのくく水考く水
 鳥影のゆくく水考く水
 藤く水考く水考く水

弘 弘 弘 弘 吸 羨 洒 林
 矣 矣 矣 矣 露 喜 能 甫
 月 朧 雲 翠 全 雪 煙 東 号 弘
 朧 隆 龍 昌 矣 矣 矣 甫 哉 矣

新編三

五

深川宿中

初雪やとととた市りとととととと 遠外

町百屋前又あり雲先

小山やふとれのおとととととと 一の壺

森のふ又とととととと 初一とととと 完酌

十月や飛とよとととととと 松溪

森とととととととととととととととと 雲霧

祖翁手向

松とれを彩風流た尾ふりれ 全

牙ととの冬うまぬり葉風呂、 素古

細山や大松ひくりもとや 斜 全

なうとととととととととととととととと 全

東京と登能山中より

紅葉あふるとや只吹く風の音 春峰

雲心の澄うとととととととととととととととと 宗露

晴尾白雲

起るより先山暮れり 東交 西京 卓志

神の留る風うちとととととととととととととととと 尼外

○たのりき人や留る居の起る雲 交麦

初雪や残一板のととととの尾 深外

余り住める下町のわたりと北の
御多々〜〜とと終〜一義の
原野めらるるを病床の窓より
うちまうめく

凜り〜花の眼よ〜柳乃名

味昔

下町も若街一可目も様丁と〜

雨々南山の両側と半額後〜

空郎菘菜〜上地を〜

は〜

西井 下地
は空 菘菜植附場

了峰も是々〜

権 森

不意の記〜

枯芦此中より挿やた〜

空

影能修新字法

沈濃花菱小春天折柳筒籠共燦然

香 羽

各自紅芽高美斛ふむ約束入新種

又

好津毛産約勺新老山染新小橋天

空

冬庭不恨芳紅お慈櫻百花〜

水尾杭ハ波又もすれ〜

空

是より動く身をそとへて
常ハ燈下又草を磨む

昔の外又燈ふるの我新うれ 空

樹下石ふり冷を食り一日を暮と

こころもや燈盡よ空海を照く

兼平ハよひ空燈ぬり雲如枝 空

横濱屋と尾巻松子の

新夜を新く

風の音よゆるりぬを〜らぬ 廿海

遠慮忌や素湯の音〜ハ燈りあふ 五権

冬の不二粒の山よりつぎ〜 双宝

提灯又神意ひり〜さむさうれ 試風

東寺も美夢もぬ〜石鏡如花 藤花女

ちりり〜くすくす木半ちり村時寺 桂子女

幾りたるおのり〜を空本立 桂露女

折込〜草より忍をそとへ 静笑

翌りの〜け跡〜と多や時百雲 大貴

雛子一羽〜と出〜とる虎うれ 未一

あらく〜や世言を詢る納を臺 空

眼子馴〜と望も枯〜とる時百 东枝

咲きや山菜花枝よあきなるるや
 新三やらゆ水とまりたり桶のふり花
 尾焼くらみり花さよる時ふり
 庭の静も初らしく小をふり
 水川やあと本京のひと時ふり
 戸田川渡し舟よるる計らふ
 愚天の多花をば
 踊る旭小鳥も思ふ初花くれ
 花の初も初くれぬれと時ふり
 雪のまとお娘ひつぎ

舞子
 梅年
 松圃
 出器
 聖井
 石外

うれー雪ふまゝ新花る尾花くれ
 庭の静も初らしく小をふり
 水川やあと本京のひと時ふり
 戸田川渡し舟よるる計らふ
 愚天の多花をば
 踊る旭小鳥も思ふ初花くれ
 花の初も初くれぬれと時ふり
 雪のまとお娘ひつぎ

梅山
 利有
 石外
 全
 全
 深室
 喜我
 茂造
 平三
 井立

けりしや第ふりたる海志の疑
 案一交りきりて龍や雲の香
 燈ひくさりのみまの燈そのゆか
 温泉よりりの冬る山路や冬種
 とーの内鶴ハ喜ころうたひやう
 とき魚もまねころうとあそむの川
 水仙や傾くころををのふ
 湖水
 強防のその所のうへとあそむの信
 ひうらやうよとあそむ月うあ

由 草
 五 物
 月 起
 全 全
 全 全
 如 極
 萬 之
 就 旌



輪輻又張りよせり 羅のまん
 内命をす載して
 芝 月

下野の國よ入る

ちり堂や名を同く山の名も喜
 ぬりや 綱代本をそまらふ
 きん儀ちゆんとうせつとみ牡丹
 子の多心祝ハゆらくと年のさ
 すんくそお岩をうまさと雲の夢
 冬とあそむやあめりて秋葉とま
 細指く人よ又あそぶくわらわ

研 月
 護 卯
 全 全
 全 全
 石 水
 石 守

猶人と志らるる者借る志られり

大念 念

蘇の根よき日ちをちやまをさる

念

魁いとう来るをとおよよを籠り

念

下総市川の衢をまの

多き上鏡矢せし後をるる

東河ぶりや江橋きよくちるる葉

藤 泉

出るの里よき

掃中をらるる掃ちやちるる葉

念

鴻の臺はる里え徳おの境前

山登の多強さるゆるる後をるる

念

護國寺

蒼て可る木の葉も可り風の音

青 豆

ちつ壺や海山よりも小柴垣

念

照る星の雲を根よれく海か

松 泉

栞敷を流のもんせり池の鴨

乙 旗

ひとたてもをむや勝手の夷播

毛 羽 女

老たりと人のちゆる先路中

東 松

松雷目四日兼感有為空郵

寺ぬ徒録霧忍と仁慈上二句

志らるるぬ人よあれり貸蒲堂

易 水

新編三

九十三

雲を伝ふは軒や厚 衾

全

つらつら物りの安きお到るまで

と手風も略りととてくられ尾を

蕉露

田の縁り又竈浮き一石の市

永二

雪の中まゝ人より雪んか

^{中村}花益

春色も新比所一より梅柳

うらみ

雪よりも河へれ手取半の雲は

桂歩

起り炭籠波おろし又崩れり

桂堂

礎並よりいほ程降る霞うね

護堂

水責いともくも籠へる桂屋を

梅雄

雲の子れ浮本移ふや夕時百
磯風の荒き雲ふかきりたる
鬼足ゆるもくくりの勢や年の至
埋火よくりれぬ名を等分

全 全
吳 抽
後 糸

沙妻舟の魚

一羽鳴ると知らず子ももあかりき

五 休

おくれーと桂も葉降を時自か

^{中村}葉 足

照る月を羽うひよ志めく浮き舟

孤 橋

ちよよ平の級を初々

^{尾上}梅 幸

人ちよよ小穂口やそくくり夷搦

は〜〜と星の影を也 鳴る子鳥、 芹 穂

霜 紀

望みけそ 夢も夢人 暮る時 鳥の 毛 菓 飲

初 患

あり〜 眼よふ心もんえそ 雪 砾 全

待 患

肩のあり 堪へそ 文を 戸 燈 全

帳 患

泊 摺て 左 懸と 俯く 案 板 全

外 患

雪 落て 引 合ふ 横と 浦 島 全

雞 面 患

鴨 ねくや 泣き ころ〜 入る さく 女 全

初 雪や 三日 月も 何る 笠 の 上、 茂 精

鳴ひ ひとり あり たり 見え ゆく 時 外、 登 外

吹 ありけり あり 雪の あり〜 山 全

響く や 壺 瓶 しく〜 あり 雪の 音、 子 襦

木の 葉 ちり ちり ちり ちり 水 の 音 あり、 有 味

昇る 旭 又 雲 の 音〜 ちり ちり ちり、 掬 身

松 風 の 涼 ちり 降る ちり 時 あり 那、 種 好

芦うねる風の聲よまてくさくさ
秋佛口一却ちやや焼くひと
十月の栲熟ぬくき夕夕りの好
乙 瓢

山雪

いつよりうき野の空さの月や
きぬ笠山よりく初雪
空兼や二三な雪も降て消
風ふちる雪の鳴る 淡雪
戸を閉て人も寐せし
表六章
武蔵 素雪
梅村
吾我
帯る
東南



露葉も逐一枯うや
多うれんせぬ 離れ
須磨の曲風の折く
清殿下りの神を
とり溜し跡織る
乙 杵
梅 辛

今年ハ 瑞文翁の降つて
くまほと降るるを初
半 醒

志くもや 望末の空を夕ぐれ
摩み石乙の山とるーくぬが

全 全

世補の唐

まぬくの空みまうぬさうま

全

阿田水神のむらうみ

うねさやひやうーあう深橋ま

全

阿居

世を地知は沙をのるを海る東が

全

うき世ら遠慮の悟よ志ん

らあも又生吹ううまの老らうり

全

及國秋の部

葉傳すのまうし後めや活の月西系

九岳

世の力を向けを望よ打破うあ

全

白雲や砂よ空つくと秋のそふ

全

多阿うを研き後や後の月、

露翠

終日本海所又終ふ

かうれも物又んえら阿の秋、

良大

秋の月うらあうけき都うり多、

文海

秋の都り眼見ーとらうよ志和ぬ、

然池

ひやくとまや高まのふるがく、

厚志

在妙又附錄

忘歸橋より於て

橋の如く風やそのよも月如環 尾法 梅程
 燈も又こよひのよありくも月、 相洲
 岸波を照く心いそ月如雲 在江 嵐生
 月をとりて雲ふんをなうり多、 野堂
 入さすくくも果む月の在るあき 三河 蓬宇
 晴よとて望も空めぬ月をみよ、 杜堂

以上杜堂の文書中「子安記」より「河」夫杜堂の句も河に在り
 書中「尚小生蓬宇河同律」を在妙と稱ひしを以前

尾の梅程河洲杜堂より三河交峯はきき人も蓬宇
 大集會よりお來り又附錄忘歸橋よりおわす河以り
 大つき月をみよ、一河に三河あり

ひと梅は秋よとまらや夢は風 三河 言之
 望のくくも都りけくも月如環、 李川
 望もくくも都りけくも月如環、 井義
 香りの香も望よとまら、一秋の如く、 守桂
 池をゆく

贅樵のきほも都り一池をゆく、 杜堂
 秋の望の香も望よからゆり、 蓬宇

東巡口徳第六 子志

三河西酒原郡吉田新町

次郎吉文及家

志紀

おと者魚る存新しく同エ...

存婦志起ぬり他母と存新の

阿ふきこころを

孤葉しく阿ふきふよりり根の志

蓮字

回書七丁末

回因酒原郡吉田新町

吉次郎輝

吉次郎
二男 利多清
三男 左多清

おと者魚る存新しく同エ...

おと者魚る存新しく同エ...

所東巡の折うら西鷹巻の

給ものろくろく云存子を...

そ文吉次郎存人くす送る

けよきとそそ子宝多新の

梅よ返むほふのくくや林の雲

左 一

月影をうつるをよめもなほ
 ものうらやみ魚より月をよめ
 なきんとて橋よは酒をまろく
 えててふふ眼をよめされま二日月は
 三日月やおちつりぬくもそのけ
 四日の月よあす
 五日の月けきこやま中宮のけ
 六日の月
 満きぬ影も林影り山の月
 六日の月

けきぬ影も林影り山の月
 七日の月
 月影のけきこやま中宮のけ
 八日の月
 月影のけきこやま中宮のけ
 九日清光
 十日の月影をよめされま二日月は
 十一日の月影をよめされま二日月は

秋風や紫陽花をさす雪うらた、
 ひらたつとあつとくたもや月暮、
 秋もよけりるくや菊は花を
 秋風や終日あつとく斜日
 植へて花をさすくたもや、
 吾輩の秋七月廿八日土曜日の
 町書局を義正寺に訪ねて
 ねー河武川と云ふ本村に於て我
 記とてさう年二十五年と云ふ一
 行へゆく遠く惜しき一葉うね

産自
 知流
 祝山
 美自
 柯丁
 櫻母
 柗壺

今津降参

くり迄の古態よやけりて、

相島

秋風の吹あけりて、

御本郷

秋風や紫陽花をさす雪うらた、

ひらたつとあつとくたもや月暮、

秋もよけりるくや菊は花を

秋風や終日あつとく斜日

植へて花をさすくたもや、

月の面鏡内をく外なりりりり

十湖

徳少寺の山中の一景

赤岩や石の森林の夕日如

空

松の青も似て似ぬ月の星も如

素山

望日をすの帯入るや露の存

小雲

夕月の冷を運ふや山は空

畫村

水更と運ふ新橋や露の聲

泉高

夕月や海も空もありのま

良古

山も空もあひ足すてあきの水

有松

樹より一樹より一樹より一樹

松

千細り小細籠をき草茎のれ

狐冬

海邊にむあや温泉尾の水も

雲

朝露や砂りし月のひりま

少

枝川に流るる送の立所

景高

望遠くを遠くゆくゆく

麓外

梅年が居る二百五十年をうりの

古宅あり

兼雪と元初の内かたし

春湖

阿まのふ日の影輝て空

晴るるり能夷地家松の山沙法

明治二年晩秋のこふまふ山暮の子木葉落

噴雪の響を感倫まゝ波濤を

滑りて海客の影を影序水鏡の

多挿と来りてまきく平橋の

能初唱

秋津渺や蒼人種の霞——烟

そく小月の白ひれきくきく丸

空宮に様をまけてまきくろよ

古々をおりよ

り燈の灯の動くなり花の影

為山

本和

風羽

己を憐れ——て人よ旅まきりの
度きを善道とりてまきくろよ

龍——をす人ひらふ落種が 信ノ

子訓——帯や月見の燈——お城、

勝為し碑の礎くく——酒、

行てもぬくりの響て舌の響 武花

沙心ちと冷ききくぬり林の水 甲斐

楊月

中川権五位源朝臣

月ひらり澄しそまこれ楊月——ら

ひとねとて人もおんてなう——ふ

空唐

就湖

松月

よ祢女

末く

竹取

○八日夕水壺病後 ○十一日能清尾時百字 ○十二日小築尾
時百字 ○十四日白鷗舎時百字 ○十六日兼より室時百字
○蘇足形より刺取性を製するにドめよ記を不たのど

贈用各品収納簿 私則

一 殺害の思忌二尺席敷し奴ヲシテ多料ヲ進呈し節ハ増楮
二 奉儀之證ヲ編フト楮モ往々敷礼之幣不口依テ此爲ラ造
レ付物未爲中ニ證ヲ乞フ
一 各家證集摺物更投之 砌法拙生礼砌之 職中賃幣在
中ニ時ハ信之 取書名号之 下ニ入摺之 證ヲ乞フ
一 各園之文書録之 節在幣ノ 職ハ其數ヲ照シ編フヲ乞フ

封翰之修從也ヲ 揮毫レ後リ生數石合ト 禮改個セガル 失ヲ以
信之 志之 失トスルヲ ナキヲ 要トス

一 若取入摺之 終ハ印信ヲ乞フ 若取舎之 及礼辨 勿率之 同入摺
或ハ先肉之 節ハ押字ヲ乞フ

己仲秋拙印 正印 封翰 雙 翰 園主人 兼 兄 主印

○口本摺小納町なる 稍前 併より 新字二篇を送る 是等の本
出州中二冊中 秋風堂 藝業の 句 附テ 以 嘲 多ク あり 其 月の本
も まう けい とも 師 の 以 嘲 一 句 なる 故 秋 風 の 句 あり 是 也
不存下 卯の 曉秋子 や 花 舞 翠 庭 一 句 家 弟 の 老 翁 記 を 併り 是 等 抄 又
老 翁 記 抄 一 句 壯 年 抄 一 句 本 文 を 後 楮 一 句

新三 案をたふさくもさくめくふかちり出し得た
 月の表生し第拾月ト未星少句をうきあそ
 夫より月の本老少り月三ををを彼星満尾り
 及いそ移移世星老よりと満りありん然るに輕屋在
 推し先時を初時しし御星を生ひん地山多星少移り
 之○十八日月の本時多星○同日西島の年志より入る
 之中ト曰は程四條通多星東入移居仁い多○世百勝能
 竹多星室町三丁目東通和自橋と無り○同日芝蔭寺より
 又多星多中ト曰は程和崎と越杖十月一日陶庵と又曰奉
 山坊法略浪星燈多お佐年時とるを江崎と留杖の由と来い

多く同時九起より入る中現存徳政人名録多輯のよりを板
 半バ刺成生るとす少中回り大坂堂崎の邊に橋北橋なる福
 四層跡七大坂の東側の北橋跡より十月分書状に星を中ト曰
 是星屋後南多星初星村星生お竹と中 南三日死老は
 致しりりあうせとと辨世

西へハ星橋のあつたり又事始の星を
 うらや一船箱ハ増多うり星小徳信の
 さひをねうひりも時を志す
 名録の初をんよ入る初時 日 影 左
 あり通う星跡のたしと星多とるは 星をり 星を

つらりーまのうらうらむのい

ゆ 派

○此五り五折依登の連水勝侯氏より祖翁自盡勢の
 流系を齎ぐーと花福のよーを
 示さるるを我申堅之尺寸を分株
 一尺六寸五分五并ボクの壺下の再
 結糸のどー一丈柄ハ原率を免
 ざんを年成ぐくも何れ結どをぬ
 うあ政三年の五月年節一被
 地ハ茂杖の節一覽一をなえ
 てもなまき海や陸たきまト下

一石を汲せりーと我々○噫ゴ下野のそく水亜物サキ勢勢勢勢勢
 造り旅泊ーとまらふそる属上来りて曰あ系諸家の風交
 を形のみども詠書のカ足らざるを以りよせんあをれと
 が乃りーまらうむとを密んや余類て曰我身あざもあえ
 社岩より傍りて居を回ドくあくるものなるぞ只身元々
 増々緑を産よーと兄社岩ハ破田を耕ー我と老るる俳
 圃を培ひのそく口を耕するのそく教する人を書ひしうを
 周旋するものカれーと性も叶細乃のあしと小名の余
 小侍類をる者、詠詠巧拙を論せだ、意志ーとよまはうと
 せい。修し所備一棟の収を分るも、堂書カせさるんや、山を

新編抄子万年屋とて真行 ○十三の三抄の蓬字 杜堂より久喜
雪の如き山よりとて五箇一とてせくはと通深然と歌くより三歌仙一

尺五寸楚

花よりを表書院て

あさうやま

川向きより

全なるの能

名目やきとみり

とよ杉の影

我雪とありてうら

こあのかん

そと角

集を家来末屯 ○十五の半 碓湯川氏
そと角の一袖を^{モカ}刺しとて余は^{カシ}鑑後を起
上の^{シラツ}猪馬のどし。 狐中 望ハ寸のう解
横一尺七分 雲^{シキ}解 讀^{アルヒト}疑一人 備ふま
雲^{シラツ}とて雲の句は異説あり。 且流り 吐^ツ
目か^ト抽の^ト技^ト先生考ありやと問ふに答
て早あう。 考^ト從^ト翻^ト編^トと載べ
己巳霜月屋り祝稿 結原乙彦著

晩音追加林を混季

つ子の戸やりおまうせの蝶をくひ 借ノ あり 練

蝶しまるるりり所ののうきとまふ 志^種 一 舟

炭皮も温泉壺取くやとてまふ 一 壺 影

庵の夕霧くまふとてまふり 伊^若 果 懸

やとておのぬぢりま 懸^り 浮^る 局[、] 其 懸

作豆國天城山取よ一子尾阿

餅より月よ志とてや山の尾 武^苑 松 井

ころと蛙や繩の結目もおりあき 上^毛 子 清

海阿まて里へなりとて子まふれ 龍 水

山より人の阿とおふしうれ
 松民
 冬籠梅しと笠をかきめり
 村野
 ちの雪やそまゝにせる葉の袖
 史風
 うまくと鶴入事あり如うれ
 月臨
 月さくくやひとくましのあは
 木祥
 言さうう首の梅返世海うれ
 暮
 明まける言さひくくや月の空
 芭蕉翁
 林部
 十七言詞百世以水雪批返推祥編
 阿波
 後人愚淺情中秘。奴麓唯存老杜詩。

翁紀二日

言の葉の玉も降し一時の雪
 皆如
 時雨降るそまゝに籠ま一時の雪
 左
 井底を露と砂の青色う那
 左
 巨燈して板倉とのこ葉吐し
 左
 さゆくの火桶寄合江湖
 左
 風のまをりよ志さる初り好
 左
 水仙や喉を押寄ふ葉のまをり
 左
 空をよせしは樹り阿の山歌
 左
 しの葉を連も阿る歌を誦たき

冬の居居りつぎふりを修る死
 志くくふまあまの終るる
 初雪の勿体つけて降るる
 重層の一り己の谷々の那
 いあくとりく暢る大板
 雀りけー亭主ハ菊セや等の枯
 草よ世嘆を來中一物枯林
 川青の打ちりたるきぬいし
 何れいーして居替る室や夕の月
 稲書やをとめるるきゆーら
 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

調の鳴感らーくろ根ちー川 全
 なすくくさる壘の母や杖の風 全

漁村

踊くく形ああろり終るる 全

竹の類句を穿本せー文考中白痴人新甫が撰ー文之五
 百類中五体か句初夏の是を二りと對よりトラス所
 新甫も五体も年浪字ハ用おふり或又を困おふりい
 去訳を遂うくーと産田年浪字を不用やと何るもの
 去書より引用する紙の紙事の訳及び更本集の西行が歌を
 終るるー同りるべー實は浪字ハ本物俗俚平語を正すより

始めり用ひ心とたのり一々編後初の後五体より必ぎ
 も答あり形心少くともやを副編二記して初学姑一
 物と為さる一

百市の百のありくく一く此の_{と使} 習件
 うつりまちかるとあ日のあつちい_{れあ} 麦京
 蚤て清を骨の早寝やあつちい_{下伝} 山木
 ちる白くそ風も色あつちい_{武荒} 三兼
 待を口の回つちい_一 水仙花、 棟翠
 枯これとこれあつちい_一 せぬ尾花、 雪朗
 鞆の外やまひあつちい_男 一那 _{お種} 李在

重編俳諧新聞誌每集全一冊俳諧書二百精舎藏

初編目録 己巳夏發行

- 夏の句數百九十六章
 - 素堂自畫贊 半梅花
 - 葱玉送集 并日
 - 枇杷舊号翻詠
 - 就館吟り
 - 夏の句數百九十六章
 - 春の句數五十二章
 - 身部追善法追り序名
 - 系遊塔落成
 - 大岩塔落成句問
 - 五人の本授
 - 故市川白猿の所九歌
- 通計二十二條

二編目録 同年秋發行

- 秋の句二百九十二章
- 冬の句五十五章
- 詩四編歌一首
- 瓊山雪山後日
- 梅多句合在納會 今三書泉
- 尋香任尾地名
- 杉風自宿野
- 石像仏遊善集成了 芳泉海
- 多遊塚在秋編圖 附
- 杉頂卜居地名
- 笠也くゝ集成 相澤海
- 其煙集成 赤峰海
- 瀧水所芳平愈
- 奇泉遊歴本初口之山日
- 燈籠よちくゝる集の句
- 良大岩山風交
- 天皇典解

附 遊女玉葉考

○春湖大貴集似為山書翰押刻

通計二十九條

○武花聖三歌成 木和柳

○正保 初編才七丁、畫村下総の初と入、右ハ上総の誤ニ編才八丁、
春ウケウの前文王記の段及、此後多々の誤ハ魁字ハ十三丁、月表の
句林の字、煙の誤カハ廿一丁、信ノ良古ハ果高の誤字ハ本編才ノ六
丁、逸外の句、くゝる、くゝり、とトカ、り、林、丁、然此の句、初才、小、中、
え、くゝる、よ、立、初、ぬ、と、海、一、志、が、後、小、又、け、り、くゝる、と、再、葉、の、由、中、くゝる

○晩香を追

冬の日字をはふれ——先、う、那 下、張 懸、雷

